

対話の哲学——ソクラテスとプラトン

〈対話の哲学〉を代表するソクラテスとプラトン。しかし、二人が対話に認めた意義は、大きく異なる。両者の比較をつうじて、なぜ何のための対話なのかを考える。

I ソクラテスの場合

- ・〈愛知〉の営み——正しい知識を求めての人々との問答。
- ・問いを共有する者同士の〈開かれた〉対話——「結論」を求めない。
- ・自身の立場——「無知の知」を自覚して人々を導く〈道〉の先達 →①

○対話の目的は、対話すること自体である。

II プラトンの場合

- ・動機——師ソクラテスの刑死。
- ・テーマ——〈悲劇を繰り返さないためには、どうすればよいか?〉 →②
- ・課題：
 - 1) 知識に至るための哲学
 - 2) 正義を実現する国家→回答：『国家』

○対話の目的は、異論を許さない結論（知識）に到達することである。→③

◎両者の比較：

対話の基本は、両者ともディアレクティケー（哲学的問答法）——ソクラテスにとっては、無知の自覚に導く方法。プラトンにとっては、哲学を完成させるための最終学課。この違いは、④対話それ自体が目的であるか、⑤対話を知識獲得の手段とするか、の違いである。

Q. 〈対話の哲学〉にふさわしいのは、④⑤のいずれだろうか。

[資料]

① 無知の知

「[神託の内容]人間たちよ、おまえたちのうちで、いちばん智恵のある者というのは、誰でもソクラテスのように、自分は知恵に対しては、何の値うちもないものだということを知った者が、それなのだと、言おうとしているようなものです。だから、これがつまり、いまもなおわたしが、そこらを歩きまわって、この町の者でも、よその者でも、誰か知恵のある者だと思えば、神の指図に従って、これを探して、しらべているわけなのです。そして知恵があるとは思えない場合には、神の手助けをして、知者ではないぞということを、明らかにしているのです」(プラトン「ソクラテスの弁明」『プラトン全集 1』田中美知太郎訳、岩波書店、1975 年、66 頁、23B-C)。

②ソクラテス批判

「一番正しいのは、哲学と政治のその両方にたずさわることだと思う。哲学には、教養のための範囲内で、ちょっとたずさわっておくのはよいことであるし、若い時に哲学をするのは、少しも恥ずかしいことではない。しかし、もはや年もいつているのに、人がなお哲学をしているとなると、これは、ソクラテスよ、滑稽なことになるのだ。そしてぼくとしては、哲学をしている連中に対しては、ちょうど片言をいったり、遊戯をしている人間に対する場合と、非常に似た感じを受けるのだ」(プラトン『ゴルギアス』加来彰俊訳、岩波文庫、2022[1967] 年、140-141 頁、485A-B)。

② 哲学的問答法

「ひとが哲学的な対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論(理)を用いてまさにそれぞれであるところのものへと前進しようとして、最後にまさに〈善〉であるところのものそれ自体を、知性的思惟のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのときひとは、思惟される世界(可知界)の究極に至ることになる」(プラトン『国家』(下)藤沢令夫訳、岩波文庫、2008 年、532A-B)

[概要]

6月の「哲学講話」では、「哲学とは対話である」ことを、三つの対話モデル——(1)「自己内対話」(2)「対面型対話」(3)「非対面型対話」——によって証明した。特に(1)(2)に関する「対話の哲学」の手本として、プラトンの残した対話篇を参照することができる。その中で主役を務めるソクラテスと、対話篇の作者プラトン、この二人が「対話の哲学」の推進者である。しかし、SとPとでは、対話の意味が大きく異なる。両者の違いを明らかにして、哲学対話の進むべき方向を考えたい。

I ソクラテスの場合

- ・〈愛知〉の営み——正しい知識を求めての人々との問答。

知恵を求める営みとして、人々と問いを共有することが、対話の狙い。「愛知」(フィロソフィア)は、教師が生徒を指導する「教育」ではない。

- ・問いを共有する者同士の〈開かれた〉対話——「結論」を求めない。

結論への到達を目的としない対話。その目的は、知を誇る相手に無知を悟らせること。

- ・自身の立場——「無知の知」を自覚する〈道〉の先達 →①

デルフォイの神託によれば、Sはアテネの知者であるとのこと。不審を抱いたSは、「無知の知」において、自分が他よりも一歩先行するという事実気づく。Sの立ち位置は、知識を求める〈道〉における先達である——この点は、新著『〈中〉のロゴス』で論じた。

○対話の目的は、対話すること自体である。

では、何のたぐいに対話するのたぐい？

結論——対話それ自体のたぐい。

II プラトンの場合

- ・哲学を志した動機——師ソクラテスの刑死。

政治家志望であったPは、若き日に体験したSの死(B.C.399. S 70歳、P 28歳)によって、哲学に転向した。

- ・テーマ——〈悲劇を繰り返さないたぐいには、どうすればよいたぐい？〉 →②

Sの刑死は、なぜ生じたのたぐい？原因は二つ、S自身の哲学、および当時のアテネの社会状況。ここから、(1)哲学の確立、(2)理想国家の建設、をめざす歩みが生じた。

→『国家』

○対話の目的は、異論を許さない結論(知識)に到達することである。→③

◎両者の比較：

対話の基本は、両者ともディアレクティケー(哲学的問答法)——ソクラテスにとつては、無知の自覚に導く方法。プラトンにとつては、哲学を完成させるための最終学課。この違いは、①対話それ自体が目的であるか、②対話を知識獲得の手段とするか、の違いである。